１２月予報（全１３枚）

病防第４５号
令和７年（２０２５年）１１月２７日

各関係機関長　様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）
令和７年度（２０２５年度）発生予報第９号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和７年度（２０２５年度）病害虫発生予報第９号（１２月予報）

Ⅰ　気象予報：令和７年（２０２５年）１１月２０日福岡管区気象台発表
◎向こう１ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要　　素	低　い （少ない）	平年並	高　い （多い）
九州北部全域 （含、山口県）	気　　温	３０	**４０**	３０
	降 水 量	**６０**	３０	１０
	日照時間	２０	３０	**５０**

Ⅱ　【今後、注意すべき病害虫】
１　発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予　想　の　根　拠			備　考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
カンキツ	ミカンハダニ	並	並	－	多～やや少 （±）	気温並（±） 降水少（＋）	
冬春トマト	黄化葉巻病	並	並	黄化葉巻病 並 コナジラミ やや多 （±）	やや多～並 （＋）	（コナジラミ） 気温並（±）	
	灰色かび病	並	並	並（±）	並（±）	降水少（－）	
	葉かび病	並	並	並（±）	並（±）	降水少（－）	
	すすかび病	並	並	並（±）	並（±）	降水少（－）	
冬春ナス	灰色かび病	並	並	並（±）	並（±）	降水少（－）	

本予報は、ホームページに掲載しています。
「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」

作物	病害虫名	発生予想		予　想　の　根　拠			備　考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春ナス	すすかび病	並	並	並(±)	並(±)	降水少(－)	
冬春キュウリ	うどんこ病	やや少	並	少(－)	並～やや少(－)	降水少(－)	
	退緑黄化病	並	やや多	退緑黄化病やや少 コナジラミやや少(－)	やや多～やや少(±)	(コナジラミ)気温並(±)	
イチゴ	ハダニ類	やや多	多	多(＋)	やや多～やや少(±)	気温並(±)	
	アザミウマ類	並	やや多	少(－)	やや多～並(±)	気温並(±)	
冬春果菜類	コナジラミ類	やや多	やや多	冬春トマトやや多 冬春キュウリ, 冬春ナスやや少(±)	冬春トマト, 冬春ナス, キュウリやや多～並(＋)	気温並(±)	
	アザミウマ類(イチゴ除く)	並	並	冬春ナス, 冬春キュウリ 並(±)	キュウリやや多～並 冬春トマト, 冬春ナス, 並(±)	気温並(±)	

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(＋)は発生を助長する要因、(－)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

２　予想発生量、根拠、対策等

◎カンキツ

１）ミカンハダニ

（１）発生量：並

（２）根拠

ア　11月の防除員報告では、平年比多～やや少の発生であった（±）。

（３）対策

ア　収穫時にミカンハダニが寄生している場合、収穫後に増殖し被害を及ぼすことがあるため、収穫期間近に発生が確認されたら薬剤防除を行う。特に、不知火等の収穫後貯蔵する品種では発生に注意する。

イ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎冬春トマト

１）黄化葉巻病

（１）発生量：並

（２）根拠

ア　11月の巡回調査では、発病株率0.4%（平年1.7%）と平年並の発生であった（±）。

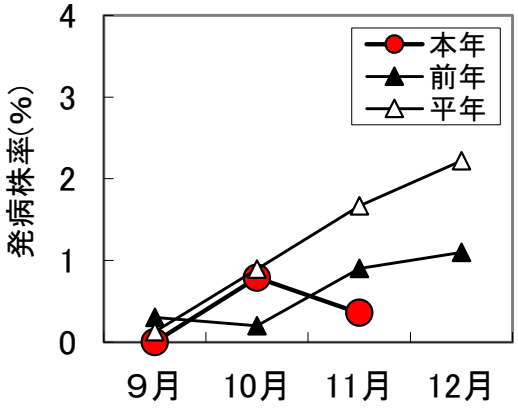
イ　11月の巡回調査では、コナジラミ類の寄生葉率3.3%（平年2.5%）と平年比やや多の発生であった（＋）。

（３）対策

ア　タバココナジラミを施設内で増やさない対策を徹底する（３　防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

イ　ハウス周辺及び内部の雑草は、タバココナジラミの生息・増殖場所となるので、定期的に除草する。

ウ　黄色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。



黄化葉巻病の発病株率の推移
（冬春トマト）

２）灰色かび病

（１）発生量：並

（２）根拠

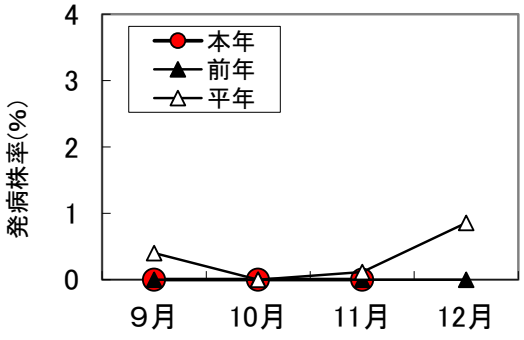
ア　11月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率茎葉平年0.1%、果実平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

（３）対策

ア　過度のかん水を避けると共に、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

イ　発病果、発病葉、花弁は伝染源となるので、早期に除去し処分する。

ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



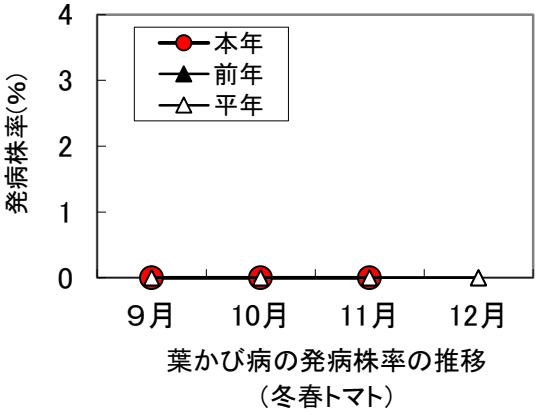
灰色かび病の発病株率（茎葉）の推移
（冬春トマト）

３）葉かび病

（１）発生量：並

（２）根拠

ア　11月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。



葉かび病の発病株率の推移
（冬春トマト）

（３）対策

ア　抵抗性品種であっても発病に注意し、発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ　発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

ウ　過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

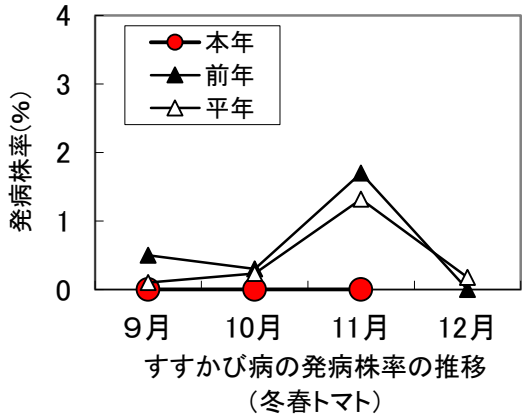
エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

４）すすかび病

（１）発生量：並

（２）根拠

ア　11月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年1.3%）、平年並の発生であった（±）。



すすかび病の発病株率の推移
（冬春トマト）

（３）対策

ア　発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ　発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

ウ　過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎冬春ナス

１）灰色かび病

（１）発生量：並

（２）根拠

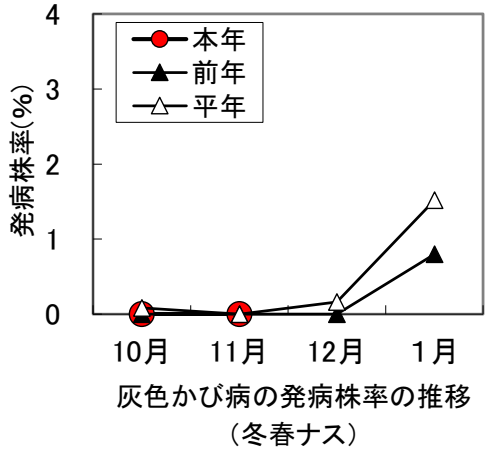
ア　11月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

（３）対策

ア　過度のかん水を避けると共に、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

イ　発病果、発病葉、花弁は伝染源となるので、早期に除去し処分する。

ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



灰色かび病の発病株率の推移
（冬春ナス）

２）すすかび病

（１）発生量：並

（２）根拠

ア　11月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

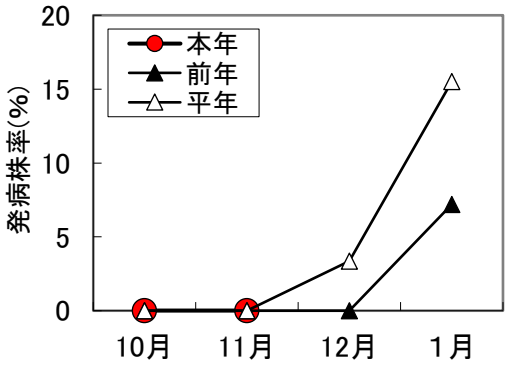
（３）対策

ア　発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

イ　過度のかん水を避けると共に、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

ウ　発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



すすかび病の発病株率の推移
（冬春ナス）

◎冬春キュウリ

1）うどんこ病

（1）発生量：やや少

（2）根拠

ア　11月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年2.5%）、平年比少の発生であった（－）。

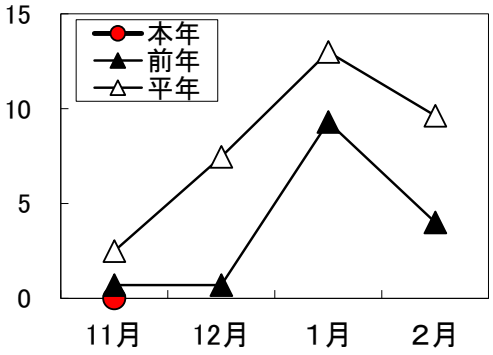
（3）対策

ア　多発後は、防除が困難なので初期防除を徹底する。

イ　発病葉や不要な下葉など取り除き、ほ場外で処分する。

ウ　薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



うどんこ病の発病葉率の推移
（冬春キュウリ）

2）退緑黄化病

（1）発生量：並

（2）根拠

ア　11月の巡回調査では、発病株率2.2%（平年6.3%）と平年比やや少の発生であった（－）。

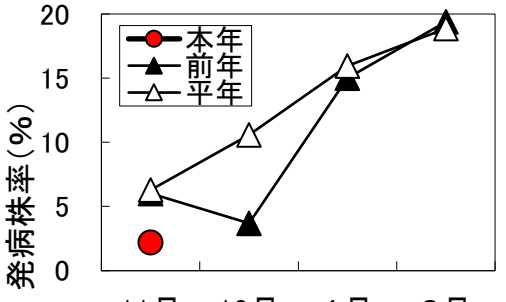
イ　11月の巡回調査では、コナジラミ類の寄生葉率1.2%（平年3.0%）と平年比やや少の発生であった（－）。

（3）対策

ア　タバココナジラミを施設内で増やさない対策を徹底する（3　防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

イ　施設周辺及び内部の雑草は、タバココナジラミの生息・増殖場所となるので除去する。

ウ　黄色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。



退緑黄化病の発病株率の推移
（冬春キュウリ）

◎イチゴ

１）ハダニ類

（１）発生量：やや多

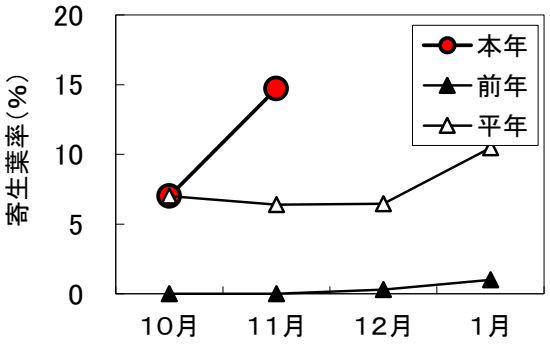
（２）根拠

ア　11月の巡回調査では、寄生葉率14.7%（平年6.4%）と平年比多の発生であった（＋）。

（３）対策

ア　寄生葉や下葉かぎした老化葉は通路に放置せず、ポリ袋に詰めるなどしてほ場外に持ち出し適切に処分する。

イ　寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に防除を徹底する（３　防除のポイント等の「**イチゴにおけるハダニ類の防除対策**」を参照）。



ハダニ類の寄生葉率の推移（イチゴ）

ウ　薬剤は下位葉の葉裏にも十分かかるように散布する。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

２）アザミウマ類

（１）発生量：並

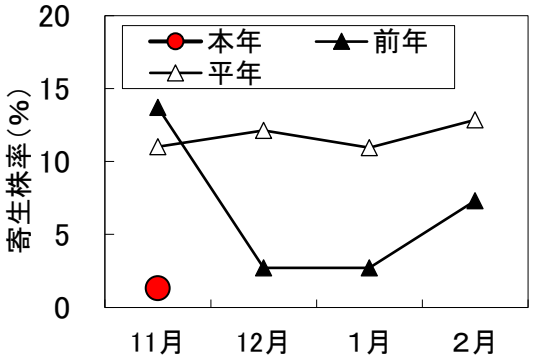
（２）根拠

ア　11月の巡回調査では、寄生株率1.3%（平年11.0%）と平年比少の発生であった（－）。

（３）対策

ア　花を注意深く観察するとともに、粘着板トラップを設置して早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。粘着板トラップの色は、ヒラズハナアザミウマに対しては青色を、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ　施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。



アザミウマ類の寄生株率の推移（イチゴ）

ウ　薬剤防除にあたっては、天敵や訪花昆虫（ミツバチ等）への影響を考慮し、薬剤を選定する。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎冬春果菜類

１）コナジラミ類

（１）発生量：やや多

（２）根拠

ア　11月の巡回調査では、トマトで寄生葉率3.3%（平年2.5%）と平年比やや多、ナスで寄生葉率22.4%（平年19.6%）と平年並、キュウリで寄生葉率1.2%（平年3.0%）と平年比やや少の発生であった（±）。

イ　八代市の野外に設置した黄色粘着板トラップのコナジラミ類の誘殺数は､11月上旬は0.08頭／枚／日（平年0.14頭／枚／日）と平年並であった（±）。

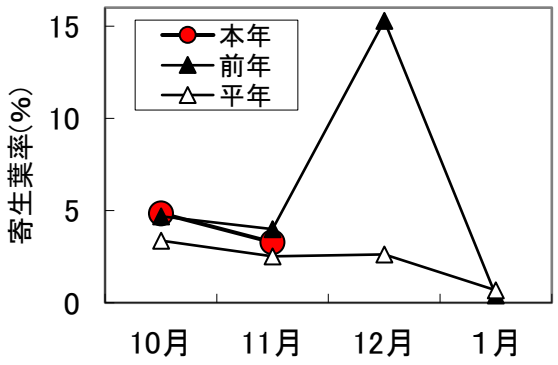
（３）対策

ア　タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（３　防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

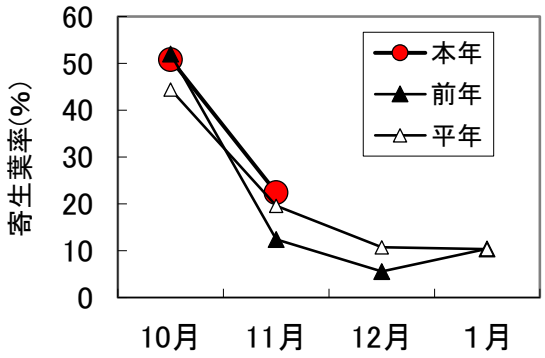
イ　施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。

ウ　黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

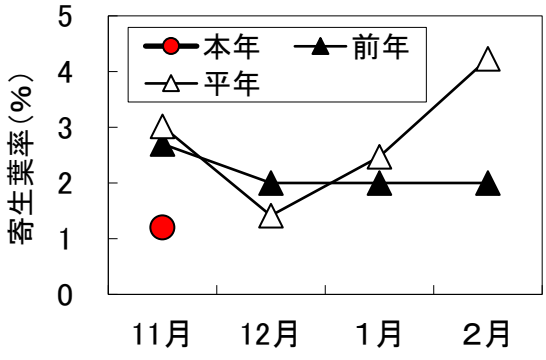
エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



コナジラミ類の寄生葉率の推移
（冬春トマト）



コナジラミ類の寄生葉率の推移
（冬春ナス）



コナジラミ類の寄生葉率の推移
（冬春キュウリ）

２）アザミウマ類（イチゴ除く）

（１）発生量：並

（２）根拠

ア　11月の巡回調査では、ナスで寄生葉率21.6%（平年4.6%）と平年比やや多、キュウリは寄生葉が確認されず（寄生葉率平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

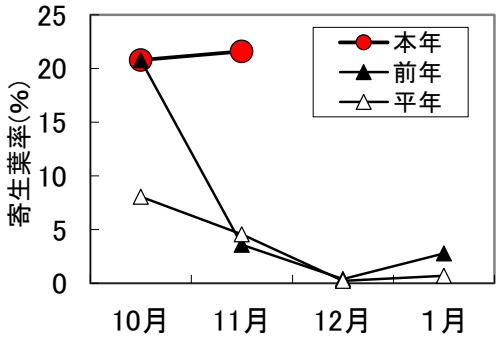
（３）対策

ア　12月以降も、施設内では発生が認められるので、粘着トラップを設置し、早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

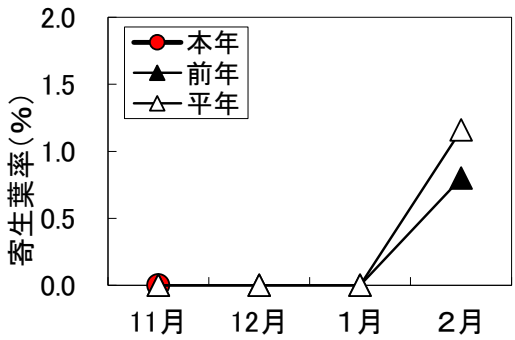
イ　ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（３　防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

ウ　施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アザミウマ類の寄生葉率の推移
（冬春ナス）



アザミウマ類の寄生葉率の推移
（冬春キュウリ）

3　防除のポイント等

カンキツのマシン油乳剤による越冬期防除について

本年秋期は、一部でミカンハダニやカイガラムシ類が多発生している園地が見受けられます。

越冬期のマシン油乳剤散布は、ハダニ類とカイガラムシ類（ロウムシ類を除く）への防除効果が高いため、特に発生が多かった園地では対策を徹底しましょう。

（１）越冬期のマシン油散布（12月下旬～１月中旬）により初期密度を抑制する。冬季の散布は落葉を助長する恐れがあるため、温かい晴天の日を選び、樹全体にむらなくかかるよう丁寧に散布する。ただし、樹勢低下樹への散布は控える。

（２）カイガラムシ類は枝葉の混みあった所に多発するため、集中的な寄生が見られた枝を除去するとともに、せん定、整枝、間伐を行い、薬剤がかかりやすい樹形とするなど、通風・採光を改善する。

施設野菜における多湿、寡日照下での病害対策

１　技術内容

（１）暖房機や循環扇で空気を循環させ、ハウス内の温度むら、湿度むらをなくす。
（２）地面をマルチフィルムで全面被覆したり、うね間（通路）やうね上に敷わらを行う。
（３）外張（天井）等の結露水は、植物体にかからないように、谷下等へ排水する。
（４）整枝、誘引、摘葉等をこまめに行い、採光を良くする。
（５）厳冬期（低温、寡日照期）は少量・多回数かん水を心がける（根傷み防止）。
（６）液肥を利用した施肥管理を行う（草勢維持）。

２　留意事項

（１）最低夜温の確保等、温度管理に注意しながら換気を行う。
（２）多湿、寡日照条件下では病害が発生しやすく、収量・品質の低下につながるので、病害の早期発見と適期（予防）防除を心がける。
（３）病害葉及び病害果等は早期に除去しハウス外に持ち出して適正に処分する。

野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これからの時期は、野外の微小害虫の数は大きく減少し、野外からの侵入はほぼ無くなります。しかし、温度の高い施設内では冬期でも活発に活動しますので、今後もウイルス病の発生拡大への警戒が必要です。また、地域におけるウイルスの伝染環（つながり）を断ち切るために、冬期においても施設外にウイルスを拡散させないようにする必要があります。

そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

１　保毒虫を施設内で「増やさない」対策

施設内での感染拡大を防ぐため、施設内に残った微小害虫を増やさないようにしましょう。また、施設内での発病を抑えることで、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

（１）施設内に粘着トラップを設置し、害虫の早期発見、初期防除を徹底する。

（２）ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスを保毒するため、微小害虫の防除を継続して行う。

（３）発病株は、重要な伝染源となるので適正に処分する。

２　保毒虫を施設外に「出さない」対策

周辺施設の作物や野外雑草にウイルスを定着させないために、栽培が終了した施設から微小害虫を逃がさないようにしましょう。

（１）微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、必ず施設を密閉して植物を枯らす。

（２）施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。密閉処理の期間はタバココナジラミは植物が枯れて１週間以上、アザミウマ類は地温１５℃以上では２週間以上を目安とする。

イチゴにおけるハダニ類の防除対策

現在、一部ほ場でハダニ類が多く発生しています。ハダニ類は、早期発見と初期防除が非常に重要です。以下のことに留意して、対策を行いましょう。

（１）未発生ほ場への持ち込みを防ぐため、ハダニ類が発生するほ場の管理作業は最後に行う。

（２）薬剤防除の際は、効果を高めるために事前に下葉かぎを行う。除去した葉はポリ袋に詰めるなどしてほ場外へ持ち出し、適切に処分する。

（３）薬剤防除は、十分な液量で薬液が葉裏にかかるように丁寧に散布し、散布むらをなくす。

（４）薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が低いため、７日程度の間隔で複数回散布する。

（５）カブリダニ類を放飼したほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を使用しハダニ類の密度を抑える。ただし、ハダニ類の発生が多く天敵で抑えきれない場合は、殺ダニ剤を中心とした薬剤防除に切り替える。

（６）薬剤の中にはミツバチの活動に影響を及ぼすものもあるので、影響の小さい薬剤を選択し、危害が出ないよう使用する。

（７）各種薬剤の殺虫効果については、令和７年５月１日付け技術情報第１号「イチゴにおけるナミハダニの薬剤感受性検定の結果」（https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/279436.pdf）を参照する。

チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ）の防除対策

チョウ目害虫のフェロモントラップ調査において、一部地域では、10月以降に誘殺数の増加が見られました。

これから気温が下がり、野外での発生は減少しますが、施設内で寄生が見られるところでは冬期も継続して被害が発生するおそれがあるため、以下の防除対策を実施しましょう。

（１）ほ場を見回り、葉や果実、花蕾における新しい食害痕や虫糞の早期発見に努め、幼虫を見つけ次第捕殺する。

（２）いずれの害虫も、老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、防除効果の高い若齢幼虫を対象に薬剤防除を行う。特にオオタバコガは、中老齢幼虫になると果実や結球の中に食入するため、食入前の早期防除を徹底する。

（３）摘心、摘花、摘葉した後の植物体には卵や若齢幼虫が寄生している可能性があるため、直ちにほ場外に持ち出す。

（４）薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。また、薬剤の使用時にはラベルに書いてある登録内容を確認して使用する。

Ⅲ　【その他の病害虫】

作　物	病害虫名	発生予想 平年比	発生概況及び注意すべき事項等
冬春トマト	疫病	並	巡回調査では、平年並(±)。 防除員報告では、平年並(±)。 発病果・発病葉は伝染源となるので、早めに除去し、処分する。
冬春ナス	うどんこ病	並	巡回調査では、平年並(±)。 防除員報告では、平年並(±)。 発病葉は伝染源となるので、早めに除去し、処分する。
イチゴ	うどんこ病	並	巡回調査では、平年並（±）。 防除員報告では、平年並（±）。 開花期までの防除に重点を置く。
レタス	菌核病	やや少	防除員報告では、平年並～少（－）。 予防が基本となるため、被覆前に薬剤散布を行う。
【野菜病害虫の共通対策事項】 ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める（病害）。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。			

Ⅳ　その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。
また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎　詳しい内容等については　病害虫防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。
※なお、本文はホームページ「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」上に掲載しています。